

- ・著者は昭和18年（1943）生まれ。
- ・特老に入れないと、施設への短期入所と自宅介護を小刻みにつないでいくか、有料老人ホームに入れるしかない。
- ・「年金と二千万円の預貯金があれば、子供や兄弟に金銭的負担をかけないで、有料老人ホームに二年くらい入れます」——二年しか入れない。。。
- ・「お金がないと、有料老人ホームには入居できません。ずっと自宅介護を続けなければならない。老々介護で、最後は共倒れになってしまう心配がある。あるいは独居老人になって孤独死を迎えるか。」
- ・「このままでは、あと数週間しか生きられない。高齢だからリスクは高い（成功率四〇%）が、手術をすればもう少し生きられます。どうしますか」——延命希望なら病院、しないなら自宅しかない。どこにしようと、最後は苦しんで死ぬ。周りの手間をかけるか否か。
- ・「すぐにはどこも入れん」
- ・「子が親のめんどうみるのは当たり前」——呪縛。
- ・病院の経営の老人ホーム： 死を看取ってくれ、死亡診断書も書いてくれる

その日がいつか来ることは覚悟していました。私が帰省した二〇〇六年十月の時点で、田舎に住んでいる父は九十三歳、母は八十八歳、東京で同居している妻の母、つまり義母は九十二歳。私は三人の高齢者を抱えていたのです。私は六十三歳を迎えたところでした。父と義母は頭がしっかりしていましたが、母は五年ほど前からボケ始め、息子の私を認識できないほどの認知症でした。

私は弟と二人兄弟のため、田舎の両親に何かあった場合は、長男の私が世話をすることに、決めてありました。妻は義母の自宅介護があるため、私の田舎に来ることはできません。つまり、男の私一人が父と母の介護をしなければならないことは、ずいぶん前から覚悟していたのです。だから私は二〇〇四年にマガジンハウスという出版社を定年退職したあと、再就職せず、フリーのライター＆編集者として体を自由におきました。

父、退院

一週間後に、弟の史洋(しょう)が来て、一緒に父の担当医から説明を受けました。その結果、父の状態は、

- 一、不整脈による心房細動で、心不全の危険がある。
- 二、心臓の弁がきちんと閉じず、血液が逆流しているため、血栓の起きる心配がある。
- 三、めまいは難聴から来ている。

結論は、あと一週間で退院できるが、これ以上良くなることはないので生活設計を全面的に変える必要がある。つまり誰かがそばについていなければならない、ということでした。

覚悟していたときが来たのです。私は四十五年ぶりに両親と暮らす決心をしました。

弟は母の認知症に驚いていました。とくに**夜の屋内徘徊**です。弟は帰省した際、和室に寝る習慣ですが、ふだんは暗いのに豆電球が点いているので、母が夜中に突然部屋の戸を開けるのです。それも二つの廊下に挟まれた部屋ですから、両方から戸を開けます。「**誰かおるのか**」と言ったそうで、弟はびっくり仰天、朝まで眠れなかったようです。

母、倒れる

平穏な生活がしばらく続きました。小さな変化は、父母ともに食事の量が減ったこと。一汁三菜だったのを一汁二葉にしました。また、父の**体力が落ち、自分で掃除機をかけることができなくなりました**。寝室、茶の間に遇一回、私か掃除機をかける。洗濯も私がします。

半年たって、介護認定の見直しがあり、父は1、母は3になりました。父は退院したため下がり、母は認知症がひどくなったとの判断でしょう。

母が時々転ぶようになり、変だなと思っていたら五月四日朝、母が起きてきません。声をかけても寝たままです。仕方なく私が支えて立ち上がらせ、台所へ連れていきましたが、一人で歩けないのです。

「もうあかん、お迎えがくるー」などと言います。

おまけに食事をしながら何度も箸を落とす。**明らかに異常事態**。連休中なので、ケアマネージャーの携帯電話に連絡しましたがつながりません。夜になってやっと連絡がつき、明日午前中に様子を見に来てくれることになりました。

母、車椅子生活に

担当医の説明によると、今週中は脳梗塞を消す点滴を続け、来週からリハビリを行なう。リハビリがうまくいかなければ、退院して**自宅で車椅子生活**になる、とのこと。入院は二、三週間の予定です。

私は毎日午前中に買い物をすませ、母の昼食に間に合うバスで市民病院へ行き、ヘルパーさんが来る夕方四時までに自宅へ戻る、という生活になりました。父と一緒に行くこともあります。

母には**食事の介助が必要**です。スプーンで口元まで持っていかなければなりません。

自宅介護の準備

脳梗塞で入院していた母に、担当医から厳しい診断が下されたのは、入院二週間後でした。私は医師に呼ばれ、次のように言われたのです。

整形外科医と看護師と協議した結果、

一、両脚の筋肉が落ちている。

二、認知症がひどい。

三、高齢である。

以上のことから、リハビリを行なっても、歩けるようになる見込みはない。だから、

四、ケアマネジャーと相談して、自宅にベッド、車椅子などを用意してください。

五、その準備が整ったら退院してください。

不安が的中した。**市民病院から完全に見放された**のです。

翌日、ケアマネジャーに自宅へ来てもらい、メジャーで寝室やトイレへの通路や浴室を測り、パンフレットを見ながらベッド、車椅子、ポータブルトイレ、入浴用の椅子などを決めました。ベッドと車椅子はレンタルですみませんが、他は購入しなければならないものでした。

食事のあとは、**ベッド脇に置いてあるポータブルトイレ**に座らせます。これにも正しい方法があって、ヘルパーさんから教わりました。まず、パジャマのズボンを膝まで脱がせ、オムツをはずして母の上半身を起こし、ベッドに腰掛けさせる。次に母の両手を私の首に絡ませ、上半身を抱えて立たせる。そのまま一緒に歩くようにしてポータブルトイレに座らせる。車椅子に乗せるときも同じ。母は体重三十八キロと軽いのですが、歩けないため重く感じるのです。いい加減にやると私が腰を痛めますから注意が必要でした。父にはとても出来ない。

．．．

夕食後、母の入れ歯を出して洗い、ケースに入れると「おおきに、サンキュー・ベリー、マッチ」と言います。面白い母です。

夜七時ごろに最後のオムツ調べ。パッドが濡れていれば替えますが、夜間用にパッドを二枚にします。オムツは濡れたり汚れていなければ替えません。一日にパッドは四、五回、それを覆うオムツは普通一回。

「うんこしたい」

一番困ったのは、母が突然「うんこしたい」と言うこと。それも食事中に多いのです。胃腸が刺激されるせいかもしれません。慌ててポータブルトイレに座らせますが、間に合わないことがあると、パッドもオムツも汚します。食事を中断して母の便を処理するわけですが、最初は父も私もいつべんに食欲がなくなりました。

逆に便秘が続き排便しない日が三日もあったりします。肛門を指で探してみると、便がカチンカチンになっている。ヘルパーさんから教えられた**ペットボトルシャワー**を使ってみることにしました。ペットボトルの蓋に錐で穴をあけ、水を入れて押すと水が一直線に飛び出すのです。

ポータブルトイレに座らせた母の背中側からペットボトルシャワーをかけ、指で肛門の入口の便を柔らかくして流します。どんどん出てくる。まだ奥に詰まっているようでしたが、母が「いたい、いたい」と言うので途中で止めました（指で肛門から便をほじくり出す行為は、素人には禁止されている）。

最近の AV 業界は、AV 女優になりたい女性はゴマンといるのに、AV 男優は千人

くらいしかいないそうです。一九九六年にベストセラーになった永沢光雄の『AV女優』という本を読めばわかりますが、女の子は、ちょっとした機会に平気でAV女優になってしまう。抵抗感が薄い。それに対してAV男優は、モノのサイズや持続力、他人が見ている前で勃起できるかなど、かなり敷居が高いため、少ないらしいのです。

それはともかく、DVDでAVを見ているとなんとなく癒されるのです。ことに、夜寝る前にお気に入りを見ると気分がよく、ストレス発散の効果がある。

母、歩けるようになる

母はひどい認知症のため、リハビリに時間がかかりました。療法士の女性が根気よく指導してくれたおかげで、八月半ばくらいにやっと平行棒を伝い歩き出来るようになりました。十月九日に施設を退所するころには、腕を支えてやれば五メートルくらい歩けるところまで回復したのです。

施設を退所して、再び自宅介護が始まりましたが、以前よりかなり楽になりました。というのは、台所で食事ができるようになったからです。

．．．

母の食事は一時間くらいかかります。一切の介助なしで、自力で全部食べることが出来るのです。父と私はさっさと食べて食器を洗い、母の世話ほせずほうっておきます。母は黙々と食事を続けます。

母の体の動きはよくなったが、**オムツは取れません**。一日に四～五回パッドを替えなければならぬのは以前と同じ。ただ、ポータブルトイレへの移動はかなりスムーズになりました。

父、再入院

そうこうしているうちに、父が下血し、貧血と脱水症状のため可知医院から救急車で市民病院へ運ばれました。昨年（二〇〇六年）とまったく同じ十月十二日。担当医の説明は前回と同じで「**心臓の薬を服むと下血し、下血を止める薬を服むと心房細動が起きる**」とのこと。どちらもうまく行くようにバランスをとる治療が難しいとのこと。父の顔色は真っ青。私に「東京へ帰れ」と言った元気はどこへやらです。父が入院したため、母と二人だけの生活になりましたが、**母を介護しながら、市民病院へ父の様子を見に行くというのはかなり疲れます**。それでケアマネジャーのKさんに母を預けられる他の施設をさがしてもらい、神坂(みさか)という山の中にある「**広済(こうさい)寮**」へ一週間ほど入れました。ここは坂下の老健より遠く、面会に行くのが大変でした。タクシー代がかかり過ぎるのです。

特別養護老人ホームという終身で預かってくれる施設は、私の田舎周辺では六か所ありますが、いずれも**四～五年待ち**状態で、すぐ入居するのは不可能。だから、**施設への短期入所と自宅介護を小刻みにつないでいくか、有料老人ホームに入れるしかない**ことがわかりました。

母、有料老人ホーム入居

母は多治見市の有料老人ホーム「ハイリタイヤー多治見」に入居できることになりました。多治見駅から徒歩八分の住宅街にあり、定員二十六人のこじんまりした建物。部屋は八畳くらいのワンルームで、ベッドと洗面台とウォシュレットの付いたトイレとタンスが作り付けになっています。みんなで食事するホールは広くはありませんが、家庭的な雰囲気があっていい印象でした。料金は以下の通り（数字は二〇〇七年当時）。

入居料 六〇万円

月額支払い 家賃七万円

管理費四万二〇〇〇円（光熱費含む）

食事代四万七二五〇円

合計十五万九二五〇円

これ以外に、洗濯代、おむつ代、介護保険実費二万円が加わり、月に約二〇万円以上かかることがわかりました。つまり父の**年金だけでは生活していけない**のです。ただし、こういう日もあるかということで、母には預金がありました。

ホームを見学して、まずしなければならなかったことは、入居金の一部二〇万円を振り込むことでした。いわゆる手付金。

次の問題は必要提出書類。それは以下の通りです。

印鑑証明（ご本人・身元引受人）

住民票（ご本人・身元引受人）

年金振込み通知書（ご本人）

介護保険証（ご本人）老人医療受給者証・健康保険証

健康診断書

身元引受人は私なので、東京へ連絡してすべて送ってもらいました。

ここで、私なりの介護とお金についての考えを述べておきます。

人は必ず介護される日がきます。その日のために定年退職しても、退職金は預貯金しておく。家のリフォームに使ってしまう人がいますが、それは必要最低限に抑える。海外旅行でぼっと使ってしまうなどというのは、とんでもないことです。

年金が出るようになって、働けるうちは働いて、その賃金で生活する。年金は預貯金にまわします。私の考えでは、**年金と二千万円の預貯金があれば、子供や兄弟に金銭的負担をかけないで、有料老人ホームに二年くらい入れます**。年金が月に十万円以下の人は、預貯金を三千万円くらい持っていたほうが安心です。

有料老人ホームにはピソからキリまであり、高いところでは入居金一億円という豪華なものもあります。全国的に見れば、入居金数百万円というものが多い。今回の母の場合も、のちに述べる父の場合も、入居金は安くすみしました。

どのくらいの有料老人ホームに入るかは、ケアマネージャーと相談するのが一番で

す。

お金がないと、有料老人ホームには入居できません。ずっと自宅介護を続けなければならない。老々介護で、最後は共倒れになってしまう心配がある。あるいは独居老人になって孤独死を迎えるか。

担当医の質問はまだありました。「延命治療はしますか」「胃カメラはどうしますか」

すべて断りました。これ以上、母を苦しめたくなかったのです。逆に私のほうから「両手を拘束してください。でないと点滴も酸素マスクもはずしちゃいますから」と伝えた。

母の最期の言葉

一月十八日午前九時、多治見市民病院から電話があり、先生がお話しすることがあるから、すぐ来てくれとのこと。嫌な予感。九時四十九分の電車で飛び乗る。

市民病院では、担当医から別室に案内されました。部屋には二枚のレントゲン写真が貼ってあります。一枚は入院したときのもの。もう一枚は今朝のものでした。

「肺炎が広がっています。あと六時間持つかどうかですから、身内の方に知らせてください」と**危篤宣言**を受けました。ついに来たか、それにしても早すぎると思いました。

父に電話してすぐ来るよう伝え、東京の弟・史洋にも電話しました。

母は、酸素マスクの下でうわ言を言っています。ベッド脇に計測器が置かれ、一分間の脈拍数が表示されています。一八〇、一九〇、一七〇と、増えたり減ったりしますが、**全力疾走に近い脈拍**です。その数値の下には波線がうねっていましたが、何かわかりません。看護師に聞くと、簡単には説明できません、と言われてしまった。

母の顔全体が冷たいので、タオルを温めて拭いてやりました。

十一時過ぎ、父到着。私は実家の近くにある葬祭場「中津川斎苑」に電話しました。父も母も亡くなったときは、ここで葬儀をすることに決めてありました。

「今、危篤だが、死んだら多治見まで遺体を引き取りにきてくれるかどうか」と聞くと「もちろん、うかがいます」との返事。

母は、酸素マスクごしに「いっちまうよー」と叫んでいます。父が「俺や、わかるか」と聞くと「うん、おとうちゃん」と答え「いちようはどこや」と言いました。私はびっくりしてベッドの反対側にいき、「ここにおるよ」と怒鳴ると、にこっと笑いました。最期になって「いちよう」と呼ぶとはどういうことなんだろう。今まで知らないふりをしていたのか、死ぬ直前に正気に戻ったのだろうか。

やがて母は、「う～ん、う～ん」と唸るだけになり、脈拍数も下がっていきました。

担当医が部屋にきました。同じ計測器がナースセンターにも置かれていて、様子がわかるようになっていたのでしょう。

午後二時六分、脈拍数がゼロになり、その下の波線が直線になりました。「御臨終です」と担当医が告げました。

弟は間に合いませんでした。「ハイリタイヤー多治見」に「今、死にました」と伝えたと「えっ」と驚いていました。多治見市役所のYさん、中津川のケアマネージャーKさんに電話で報告。

「中津川斎苑」に電話すると、すぐ遺体を引き取りに来るとのこと。ついでに今後の予定を決めました。今夜は控室に安置し、翌十九日夕方六時から通夜、二十日午前中火葬、午後二時から葬儀と決まりました。

看護師さんが、母に口紅をさし、軽く死化粧してくれましたので、安らかな顔になりました。苦しんで死んだことは明らかなのに、デスマスクはきれいでした。

三時、弟到着。四時、「中津川斎苑」の遺体運搬車到着。キャスターに乗せ、ビニールで包みます。病院の裏口まで担当医や看護師さんたちが見送ってくれました。遺体運搬車には、私だけが同乗しました。父と弟は電車です。

中津川に着いてからは、実家の周辺をゆっくり走ってもらいました。本来なら一旦自宅に帰すべきですが、細い坂道をキャスターで下りるのは無理なので、直接「中津川斎苑」へ向かいました。

控室に簡単な祭壇を作り、その前にふとんを敷いて母を寝かせます。

エアコンが効いているので、母の胸から腹にドライアイスを載せてふとんを掛けます。顔には白布。

遺体の前の小机には、ロウソク立てと線香立てと鉦(かね)。一膳飯に箸を立てたものが置かれました。

「中津川斎苑」の人たちは慣れたもので、てきぱきと事を進めていきます。

責任者がカラー写真のメニューを持ってきたので、値段を見ながら、弟と相談し、祭壇の飾り付け、お棺、霊柩車、香典返しなどを決めました。贅沢はせず普通にしたいつもりです。

~~~~~

よとぎ【夜伽】

夜、物語などをして相手になること。寝所で、女が男の相手をする事。また、警護や看護、お通夜(つや)などのために、夜通しそばにつき添うこと。

~~~~~

母の通夜

翌朝、友人の車で市役所へ行き、死亡届を出して火葬許可証をもらい、自宅に寄って喪服に着替えて「中津川斎苑」に戻りました。

東京から息子、娘、甥、姪、従兄弟たちが到着した。駅前のビジネスホテルに部屋を予約してありました。

午後四時納棺。母に死出の旅装束をします。白足袋をはかせ、脚絆と手甲を当て、頭陀袋(ずだぶくろ)を着せ、草履と杖を入れます。頭部には藁の笠。その上から、父が自宅から持ってきた、母の茶の縞の着物を広げて掛けました。その他、遺品の数々も。

菩提寺・東円寺の和尚さんが付けた母の戒名は「虎室道栄大姉」。享年九十歳。

母の葬儀

寺志納金 三十五万円
戒名料 五万円
役僧料 三名×四万円＝十二万円
食前料 四名×二千円＝八千円
合計 五十二万八千円

母の定期預金の解約

- 一、母の出生、婚姻から死亡までの連続した戸籍謄本と印鑑証明書
- 二、相続人である父、私、弟の戸籍謄本と印鑑証明書
- 三、十六銀行が出した書類に、父、私、弟が自筆で住所氏名を記入し、実印の押捺

たいした金額ではないのに、手続きに約一か月もかかった。

父、手術 95 歳

翌日、病院へ行くと父は同じ四階の外科病棟に移されていました。さっそく外科の担当医に呼ばれました。写真家の加納典明によく似た医者で、やはりレントゲン写真を見せながら「このままでは、あと数週間しか生きられない。高齢だからリスクは高い（成功率四〇％）が、手術をすればもう少し生きられます。どうしますか」と言う。

私には決められないので、医者と父の病室に行き、単刀直入に「どうするか」と聞きました。父はしばらく考えて「このまま一か月生きても、何もできるわけじゃないから、手術のほうに賭けてみる」と答えました。すると医者は「では、これから手術しましょう」と言います。父は「え、これから？」と驚いている。「遅らせても意味がありません。これ以上ほうっておくと、腸が壊死します」と医者。外科医は判断が早いと思いました。

弟に父の決断を伝えると「ほー、父ちゃんはえらい」と感心していた。

午後三時四十五分に手術開始と決まりましたが、全身麻酔に父が耐えられるかどうか心配でした。自宅に飛んで帰り、父と私の印鑑を持って病院に戻りました。たくさん書類に署名と捺印。

三時四十分、父は手術室に入りました。私は待合室で弟とケアマネージャーに電話したあと、松本清張の文庫本を読んでいた。

一時間以上たった五時、控室のドアが開いて、手術着姿の医者が現れ「無事終わりました」と言いました。おお、やったあ、と口に出そうになりました。

ナースセンターの隣の処置室に父は運ばれていました。「声をかけてください」と看護師に言われ「父ちゃん、よかったなあ、手術成功したよ」と耳元で怒鳴ると「寒い、寒い」と言うだけです。

「手術のあとはみんな寒いと言うんです。お腹を開いてますから、内臓が外気に触れたせいかもしれません」と看護師が教えてくれました。父の体には電気毛布が掛けられていました。

「アピタ」

前の交差点の信号が青になったので横断歩道を二、三步踏み出した途端、右太腿上部に激しい衝撃。「やられた」と思いました。すぐ後頭部が道路のコンクリート面に打ち当たる第二の衝撃。これはかなり重症だと感じました。誰かが、私の上半身と下半身を持って、歩道へ運んでくれるのがわかりました。

「くそー、俺は今、絶対に入院できないんだぞ、誰だ、こんなことしやがって」と叫んでいました。同じことを何度も怒鳴る自分がわかっていた。腹が立ってなり喜ん。交通事故だけは、ずっと注意してきたのに、この大事なときになぜなんだ、という気持ちでした。

．．．

十時に私の脳外科診察。CT スキャンのレントゲンを見たたん、担当医は「これはあかん。**即入院**」と言いました。脳挫傷と急性硬膜下血腫との診断でした。父と同じ病棟の二階下の病室に入れられ、点滴開始。四階のナースセンターに連絡し、私が交通事故で入院していることを伝え、父には絶対内緒にしてくれと頼みました。あとから考えると、**同じ病棟に親子で入院していて、誰も看病する身内がない**というのは情けないというか、滑稽です。

．．．

一週間後、診察を受けに行くと、担当医は CT スキャンのレントゲンを見て「硬膜下の血の塊が少しずつ溶けだしている。この溶けるのが止まったら、**頭に穴をあけ、血を抜く手術をする**」と言われました。まさか手術をすることになるとは思っていませんでしたのでショックです。

．．．

市民兵昆での次の診察日、担当医に「ずいぶんよくなってきた。このままいけば手術しなくてすむかもしれない」と言われました。「佐生医院」の点滴が効いたのです。

さらに一週間後「あれ、もう治っている。血腫が自然に脳内に吸収されてしまったらしい」と言われ、**手術の必要はなくなりました**。ほっとしたものの、頭痛は治まらず、その後も「佐生医院」へ通いました。

結局、**事故から約二か月後**の六月十八日、市民病院の診察で「もう完全に治っている。**本日で診察終了**」ということになりました。

「佐生医院」のほうも、七月二日、最後の MRI 検査の結果「異常なし、後遺症もないでしょう」と診断された。

前回同様、**イレウス管**で胃腸の

残留物を体外に吸い出します。黒線色の液体がどんどん出てきます。父はかなり苦し

そうです。

どうにか落ち着いたのは夜の九時ごろで「今度はダメやろな」と父は呟きました。

．．．

その通りで、三日後にはイレウス管も取れ、顔色もよくなりました。腹の痛みも消え、「もう治った」と父は言います。なんだか当てがはずれたような回復力でした。

~~~~~

・腸管に通過障害が起こり、腸の内容物が滞ってしまうのが腸閉塞（イレウス）です。排便や排ガスがなくなり、腹痛、おう吐、腹部膨満などの症状が出現します。

~~~~~

母の初盆

この町は七月がお盆です。母の初盆になりますが、父が入院中なので、私一人で準備しなくてはなりません。仏壇を開け、菊花を花瓶に活けます。お菓子のラクガン、果物（バナナ、さくらんぼ、メロン）を供え、祭壇テーブルにロウソク立て、線香立て、鉦、線香を並べます。仏壇脇には前もって届いていた卒塔婆を立て、お盆用の提灯を二つ組み立てて置きます。提灯に灯りがついて、くるくる回ります。

畑仕事

元気になった父は、畑に里芋を植えました。やがて芽が出て、葉が大きくひろがってきました。父が私に命令します。

「肥料を買ってきて撒け」「干草を畝(うね)の間に入れろ」「雑草を抜け」

しばらくは命令に従っていましたが、月末の面談にきたケアマネージャーの K さんが、

「虎雄さんより、息子さんのほうが疲れてるみたいですよ」と言うと「これはズク（根性）がないからねえ」と父が答えたので、私は決心しました。

「石垣の草を抜かんと、石垣が崩れるぞ」「畑にもうひと畝作れ」と、こき使うので、ある日、「そんなこと、俺はできん」と言ってやりました。

「なんでや」と聞くので、「そんなことしたら、俺のほうが倒れる」と正直に答えました。父の命令通りにしていたら、本当に私は倒れそうでした。

父は何も言わなくなり、やがて畑の一部を残して、あとを全部ビニールシートで覆うよう便利屋さんに頼みました。こうすれば雑草も生えてこないのです。畑仕事から解放されて、私はほっとしました。

案の定、ある朝台所の火災報知器が鳴りました。すっとなで行くと、父が味噌汁の

鍋をガス台にかけたまま忘れ、鍋から煙がもうもうと立っています。父には**火災報知器の音が聞こえません**。危ないところでした。さすがの父も煙で気がついたようで、真っ黒になった鍋を「これ、捨てろ」と不機嫌に言いました。不甲斐ない自分に腹が立ったのでしょう。

それ以来、父は台所を出るときは「ガス元栓よし」「ストーブよし」「窓の鍵よし」と指さし確認し、夜寝るときも「炬燵よし」「テレビよし」と声に出して確認するようになりました。

私は三十七歳のとき、右首に腫物ができ、**瘰癧**と診断されました。結核菌が右首のリンパ腺に入る病気です。二十四日間入院しました。父の結核のせいかと疑いましたが、結果的には雑菌でした

~~~~~

瘰癧るいれき

るいれき【瘰癧】

結核菌の感染による頸部(けいぶ)のリンパ節の慢性的なはれもの。ぐりぐり。

~~~~~

減らされたヘルパーさんの穴埋めのため、シルバーさんを頼むことにしました。シルバー人材センターに電話すると、私の住所近くの**七十三歳のおばさん**を紹介してくれました。その結果、火、木、土曜日はヘルパーさん、月、水、金曜日はシルバーさん、日曜日は今まで通り私、ということになりました。シルバーさんは一時間八百円ですが、人材センターへの手数料が七%かかって八百五十六円になります。月末締めで請求書がきて振り込む手順です。月一万円と少しですが、これで夕食作りはなんとかなりました。

しかし、シルバーさんは長く続かず、すぐ辞めてしまう。何度も人が代わって面倒なので、我が家の元ヘルパーで退職した人を一日千円で来てもらうことにしました。慣れた人のほうが、私も気楽です。

父と弟は同じ歌人だから、短歌の話で気が合いそうですが、弟に言わせると、父と暮らすのは、**二泊三日が限度**だそうです。

父は自信家です。自分だけが正しいと思っている。だから**他人のすることが気になって、つい文句が出る**。とくに身内に対して厳しく当たります。認知症だった母に対する態度もDVに近いほどひどかった。

弟に父の介護などできるわけがないのです。

元気な老人が入れるのほ**ケアハウス**といって、市内には一か所（当時）「リリーフ館」があるそうです。さっそく電話すると、現在**三十人待ち**とのこと。はかに恵那市

に一つあるが、そこは恵那市民しか入れないという。あとは多治見市に「ベルツリー」というのがありましたが、ここも二十人待ちでした。とりあえず各所に入所申込み書を送ってくれるよう頼みました。

父に状況を説明し「すぐにはどこも入れんよ」と伝え、「そんなに難しいもんなのか」と言って黙ってしまいました。

父が「お疲れさん。お前はけっこうやってくれた」と言って十万円くれました。「介護料か」と聞くと「親子の関係で介護料はないやろ。子が親のめんどろみるのは当たり前や。だから気持ちや」ということで、ありがたくいただきました。

~~~~~

しょし【庶子】

本妻以外の女性から生まれた子。旧民法では、父が認知した私生子。

~~~~~

市民病棟からもらった「生薬館」のパンフレットを調べると以下のような内容（数字はすべて当時）。

入居金	十万円
保証金	二十九万円
月額利用料	二十万六千円
（内訳）	家賃 六万五千円
	食費 五万七千円
	管理費 四万二千円
	運営費 四万二千円

母のときの経験から、おそらくこれにいろいろ上乗せされるだろうから、月額三十万近くかかるだろう。父の年金が月に二十五万円だから、それ以上かかる分は父の預金を崩していけばいい。父のお金なのだから、父のために使えばいいのだ。そう考えると気が楽になった。

この老人ホームは、実は「伊藤内科」という病院の経営で、死を看取ってくれ、死亡診断書も書いてくれるそうです。これは助かります。母のときのように、救急車で病院に運ばれるということがないのですから。

血液検査の結果、前立腺特異抗原（PS）が 55 に上がっている。ということは、骨や他の部位にガンが転移している。このままだと早くて三カ月、持って半年でしょう。

独居生活になった私聖番怖いのは入浴です。浴室内の温度と脱衣所の廊下との温度差が大きいと倒れ与。私の友人もそれで亡くなってい与。

それで、廊下に灯油ストーブを置いて、あらかじめ温めておく。そうすれば、まず安心です。もちろん昼間しか入浴しません。

夜寝るときも、玄関の鍵はかけない。私が携帯電話に出なかったとき、友人が心配して来てくれても、すぐ入れる状態にしておくためです。

一人暮らしそのものは平気ですが、何かの拍子で倒れるのが怖いのです。

六月一日に、私は七〇歳になりました。古稀です。東京の知人や同級生で、六十代で亡くなった人が五人もいます。父より先に死ぬわけにいかない、というのが私の信念です。

もし、自宅介護していたら、父は百歳まで生きられなかったでしょう。季節感が全然なく、常にジャージで過ごせるように館内温度が調節されている老人ホームだからこそ快適に過ごせるのです。食事メニューもしっかりしています。

白内障の手術

私の白内障はだんだんひどくなって、風景が霞んでいるし、人の顔も近くまで寄らないと、誰なのか判別できない状態でした。

．．．

午後から左目の手

術なので、昼食はなし。手術一時間前から、瞳孔を開く目薬の点眼。

午後三時半、ブリーフと部屋着だけで車椅子に乗り、二階の手術室へ。手術室は暖房が入ってないので寒い。名前を確認したあと、右手首に点滴用の針、左腕に血圧計、胸には心電図の端子を三つ。室内には五～六人が動いている様子。寒いので毛布をかけてくれた。

手術開始。目をいじられるのは怖い。よく覚えてないが、まず水で目を洗い、左目端から麻酔注射。目の上に大きな器械がきてピンクの丸い玉が三つ見える。それをじっと見続ける。目の上側を切って、レンズを差し入れる感じ。痛くない拷問を受けているような気分。十五分くらいで終了。大きなガーゼの眼帯を当て、テープで止める。車椅子に乗って部屋へ戻り、ベッドで一時間安静。目の奥にぽっかり穴があいた感じがするが、痛みはない。

七時夕食。全部食べた。自宅ではこんなに食べたことはないほどの量。昼食を抜いていたせいかもしれないが、ごはんがうまい。

右目は霞んでいるのでテレビが見にくい。

．．．

一月二十九日（水）午前六時に起こされる。温かいタオルをくれたので顔を拭く。午前七時朝食。やはり牛乳が出て、便秘解消。午前九時、四階病棟にある診察室で左目の眼帯をはずされる。よく見えるので驚く。霽すっかり消えている。素晴らしい。

父、危篤

三月二十八日。「生楽館」から電話。父が昼食を食べなかった上、腹痛を訴えている。水分も摂らないので点滴しているとのこと。

翌日二十九日（日）、午前五時突然「生楽館」からの電話で起こされる。父が危篤です。つまり死んだということ。老人ホームでは「危篤」とは死を意味する。

すぐ「中津川斎苑」に連絡し、遺体を引き取る車に同乗させてもらうよう頼む。六時半に「中津川斎苑」を出発し、四十分で「生楽館」に着いた。死亡診断書を見ると、死亡時刻は「平成二十七年三月二十九日午前七時四十一分」とある。つまり伊藤内科の医者が来て診断した時間です。死因は心不全、前立腺がんがあったが、直接的には肺炎。百一歳と六か月だから、まあ老衰のようなものだ。享年百二とした。

「中津川斎苑」の女性が、父の遺体に背広を着せてくれた。父のデスマスクは薄く笑っているようないい顔だった。

やがて友人たちが帰り、私と父二人だけの夜が来た。私は缶ビールを飲みながらテレビを見ていました。悲しみはなく、これで介護は終わりだとぼっとした気分で、缶ビールを五本も飲んでしまった。

父の遺産は弟と想像していたより少なかった。十六銀行に六百万円、郵便貯金が一千万円。

これを相続する手間が大変だった。

おわりに① （単行本）

私の父と母は、畑で野菜を作り、自給自足しながら、質素な暮らしを続け、こつこつと預貯金をしてきました。父が教師を定年退職後、再就職しなかったのは、幸いなことに共済年金が高かったからです。

いまや、退職しても、年金支給年齢まで退職金を食いつぶすしかなく、年金が出るようになって、年金だけでは暮らせません。

しかし、私も古稀を過ぎ、いつ介護される側になるかわからない。東京から息子や

娘が来て、介護してくれる望みはありません。「子が親の面倒みるのは当たり前や」という父の世代の考えは、もう通用しない。逆に私は、子供に迷惑をかけたくないという気持ちのほうが強いのです。

おわりに② （文庫）

私は今、父が六十年前に建てた家に一人で暮らしています。妻は東京で仕事をしているので、田舎へは来られません。市内に肉親はいませんが、友人はたくさんいるので、寂しくはありません。

両親を看取するという呪縛から解放されたせいか、体重が四キロも増えてしまいました。元気で風邪もひきません。男として性的欲望はありますが、加齢のせいで肝心なものがピクリともしません。これはもう諦めました。

もう東京へ戻る気はありません。のんびりした田舎暮らしを楽しんでいます。「坊っちゃん文学賞」の予備選考と「島崎藤村記念文芸祭」の選考委員という仕事はありますが、慣れていますからどうってことはない。

（二〇一七年六月）

3

24 阿比多尔
41 阿比多尔

41 阿比多尔

42 阿比多尔

44 阿比多尔

47 阿比多尔

48 阿比多尔

49 阿比多尔

52 阿比多尔

53 阿比多尔

64 阿比多尔

65 阿比多尔

66 阿比多尔

70 阿比多尔

71 阿比多尔

72 阿比多尔

76 阿比多尔

78 阿比多尔

79 阿比多尔

82 阿比多尔

88 阿比多尔

89 阿比多尔

91 阿比多尔

96 阿比多尔

98 阿比多尔

102 阿比多尔

103 阿比多尔

105 阿比多尔

107 阿比多尔

108 阿比多尔

112 阿比多尔

116 阿比多尔

118 阿比多尔

134 阿比多尔

138 阿比多尔

142 阿比多尔

147 阿比多尔

151 阿比多尔

153 阿比多尔

157 阿比多尔

163 阿比多尔

164 阿比多尔

167 阿比多尔

173 阿比多尔

178 阿比多尔

187 阿比多尔

208 阿比多尔

215 阿比多尔

216 阿比多尔

218 阿比多尔

223 阿比多尔

226 阿比多尔

249 阿比多尔

250 阿比多尔

253 阿比多尔

257 阿比多尔

258 阿比多尔

259 阿比多尔

260 阿比多尔

261 阿比多尔

262 阿比多尔

263 阿比多尔

264 阿比多尔

265 阿比多尔

266 阿比多尔

267 阿比多尔

268 阿比多尔

269 阿比多尔

270 阿比多尔

271 阿比多尔

272 阿比多尔

273 阿比多尔

274 阿比多尔

275 阿比多尔

276 阿比多尔

277 阿比多尔

278 阿比多尔

279 阿比多尔

280 阿比多尔

281 阿比多尔

282 阿比多尔

283 阿比多尔

284 阿比多尔

285 阿比多尔

286 阿比多尔

287 阿比多尔

288 阿比多尔

289 阿比多尔

290 阿比多尔